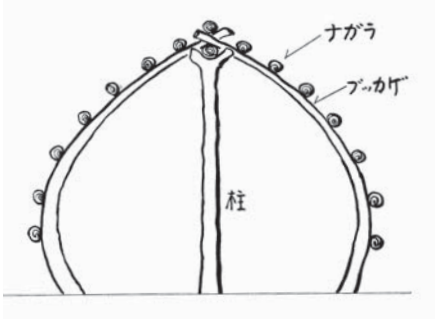
町史 とっておきの話 286

只見　ぜんめえ物語①

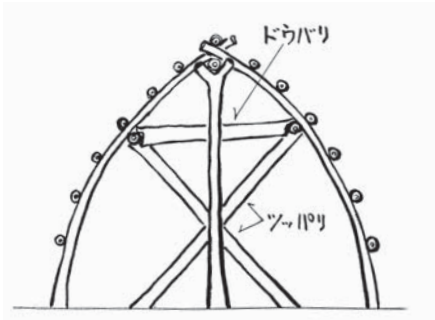
―ぜんまい小屋―

鈴木（すずき）　克彦（かつひこ）

▼今月号からは、只見町のぜんまいについての聞き書きです。
▼執筆者は元福島県立博物館学芸員の鈴木克彦さんです。平成十七年までは朝日中学校で社会科教諭として勤務されていたこともあります。また、『只見町　川と人の物語』の調査・執筆も担当され、現在は昭和村にお住まいです。
▼六回の連載です。ご期待ください。



▲（図1）ぜんまい小屋のコヤガラ組断面図



▲（図2）トメ小屋にされたぜんまい小屋

只見でぜんまいといえば、田子倉、入叶津、蒲生が真っ先に思い浮かびます。そこで今回は昭和七年生まれで、昨年（平成二十九年）八五歳で亡くなられた馬場正毅さん（蒲生）から亡くなる前年の七月にうかがった話をもとに構成してみました。

蒲生でぜんまい採りをする人たちの多くは、それぞれ家族ごとに毎年同じ山で二週間から三週間ほど（五月中旬から六月上旬）太いぜんまいが生えそろう真奈川の奥山にぜんまい小屋を建て、現地で採集から干す作業まですべてをこなしていました。これを泊まり山といっていました。そこで人々の住居兼作業場となったのが、ぜんまい小屋で現地に生えている雑木を利用した△型の小屋でした。

ぜんまい小屋の多くは、生活水が得やすい沢の近くに構えるのが一般的です。そして、場所が決まれば、次に小屋の中央部となるところに「炙（あぶ）りホド」と呼ばれる竈（かまど）作りから作業は始まります。まず、竈となる所の土を一尺ほど掘り下げたら、周りに高さ二尺ほどの石垣を作ります。その上に太い丸太を載せて転がらないよう壁土で詰め物を施します。

「炙りホド」ができたら、次は「コヤガラグミ（小屋柄組）」です（図1）。小屋の骨組みとなる材料を互いに結わえつける仕事です。まず、先が岐になった木を柱として地面に穴を掘って立てます。岐の部分に棟木（むなぎ）を載せ、そこに、古民家の扠首（さす）に当たる「ブッカゲ」と呼ばれる材を渡します。ブッカゲは直径四寸程度のナラやクリ、ときにはブナなどの根曲がりを用います。根曲がりの材を使うことでトマトハウスのように小屋の内部空間を広く取ることができます。次にブッカゲの外側にナガラ（一般家屋の母屋（もや）に当たる）と呼ばれる細木を渡せば、小屋柄組は完了です。山から材料となる木を切り出すところから組み上げるまで、慣れた人でも二人で二日ほどは要したといいます。

最後は屋根葺（ふ）きですが古くは茅（かや）葺き屋根が一般的でした。まず、ブッカゲとナガラの全面に柴を敷いて結わえます。これは茅が小屋の内側に飛び出さないようにするためです。その後、下から上へと茅を立て込みます。茅は、短いものから細いものまで何でも利用します。蒲生の奥山の多くは岩山であるため、茅には恵まれていません。このため、秋には方々から茅を刈り集め小屋を設営する場所の近くに囲って来春に備えなければなりませんでした。また、茅がほんのわずかしか手に入らないような山に小屋を建てるときには、使用する茅が少なくて済むように、屋根の下地に柴木を厚く並べたりすることもありました。

秋になるとぜんまい小屋の多くは解体し、部材は翌春に備えて比較的安全な場所に囲って置きます。小屋を毎秋解体する理由は、雪の重みでつぶされるということもありますが、一番の理由はエイ（表層雪崩）の危険性が高かったためです。

一方、エイの心配がない所に建てたぜんまい小屋の場合、雪で小屋がつぶれないよう、秋に「トメゴヤ（留小屋）」を施さなければなりませんでした。トメとは雪の重みに耐えられるよう小屋を冬の間だけ補強し、冬期間もその場に留め置くという意味です。村人は「俺（おら）、今日天気良（い）がったから、トメ小屋しに山さ行ってきた」というようにトメという言葉を使います。トメ小屋の作業とは、丸太でドウバリ（胴梁）とツッパリを施すことです（図2）。

そして、春先固雪になる頃、村人たちの日常会話の中に「小屋場に土（つち）撒（ま）いできた」「小屋場を掘り開げできた」「小屋場開げに行ってきた」などという声を耳にするようになると今年もぜんまいの季節が迫ってきたことを実感します。